

# ケラビット語バリオ方言における接辞 *ne-*, *pe-*, *be- -an* の機能について

武内 康 佳

## 1. はじめに

ケラビット語バリオ方言（以下ケラビット語）はマレーシアのサラワク州北部、バリオ村で話されているケラビット人の言語である(Takeuchi 2016)。系統的にはオーストロネシア語族、マラヨ=ポリネシア語派のケラビティックグループに属すると考えられている (Simons 2018)。また、Amster (1995), Hemmings (2016) にはケラビティックグループの言及はなく、ケラビット語は周辺言語（ルンバワン語、トリン語、サバン語）とともにアパドゥアットグループを形成しているという。このように系統に関しても諸説ある言語であり、言語学的な研究も非常に限られている。語彙集を作ろうと試みられているが、形態素の研究や語彙の定義も十分ではないため困難である。本稿では語彙の定義が曖昧な発話動詞の意味について触れ、どのような接辞が付くか、接辞により語や文がどのように変化するか観察する。

収集した文の中で発話動詞につく接辞は *ne-*, *pe-*, *be- -an* の三種類であった。本稿では、発話動詞の文をもとに接辞の機能を提案し、発話動詞以外の動詞にも着目して記述していく。

## 2. 先行研究

### 2.1. ケラビット語の接辞

ケラビット語の接辞についての先行研究は Hemmings (2016) が提案しているものである。Hemmings (2016)では、ケラビット語のヴォイスについて記述が行われており、接辞はこのヴォイスに密接に関わっている接辞の分析も行っており、14の接頭辞、3つの接中辞、4つの接尾辞があると示している。しかしその中のいくつかの接辞を多機能型接辞であると説明しており、主要な接辞の機能を示しておらず、より体系的な記述の余地があると思われる。

特に、本稿で取り上げる接辞 *ne-*, *pe- be- -an* に関する Hemmings (2016) の記述を表1にまとめた。*ne-* に関しては2つの種類であるとして1,2の番号をつけ区別しているが、*pe-* に関しては多機能型接辞と記述して1つの接辞であるとしている。また、*be-* 単独については記述がなく、*-an* のみで用いられる場合は、場所名詞化の機能があると述べている。さらに、*pe- -an* がペアとして現れる接周辞であるとも述べている。今回取り上げるこれら3つの接辞を表1に示す。

表 1 : Hemmings(2016)によるケラビット語接辞 *ne-*, *pe-*, *be-* *an* の記述

No	接辞	機能	例 (原形)	(接辞を伴った形)
1.	<i>ne</i> <sub>-1</sub>	perfective (完了相)	nerem 「沈む」	nenerem 「沈んだ」
	<i>ne</i> <sub>-2</sub>	accidental (付随的)	terem 「沈む」	neterem 「予期せず何かを沈める」
2.	<i>pe-</i>	reciprocal (相互)	keli? 「知っている」	pekeli? 「お互いを知っている」
		causative (使役)	rudap 「眠る」	merudap 「眠らせる」
		plural actor (複数動作主体)	lubid 「回る」	pelubid 「みんなが回る」
3.	<i>be-</i>	記載なし		
4.	<i>-an</i>	locative nominalization (場所名詞化)	telen 「飲み込む」	telenan 「喉」

(Hemmings 2016 : 111)

*ne-* が 2 つの接辞であり、*pe-* が 1 つの接辞である記述についての十分な説明がない。また、ヴォイスに関わる接辞については詳細な記述があるのに対して、その他の機能についての説明は少ないことから、接辞についてより詳しく、体系的に記述する必要があると考えた。

## 2.2. ケラビット語の動詞

接辞の機能について記述を行おうとした際に、問題となったのが接辞を伴う動詞の原形について、その機能が明らかにされていないという点であった。接辞がついて意味がどのように変化したのか、どのような動詞につく接辞であるのかを記述する際、接辞を伴わない元の動詞の機能を明らかにしなければならない。しかしながら、動詞の機能について最も詳しい記述がなされるべきであるケラビット語の語彙集において、Amster (1995) は語の意味記述を試みたが、特に発話動詞などの類似する動詞については明確な意味の相違点が記述されていない。本稿で扱う発話動詞を Amster (1995) は下のように記述している。

表 2 : Amster (1995) による発話動詞の記述

No.	語彙	意味
1.	karuh	n. language, word v. speak, say
2.	keneh	v. (past tense) say, tell
3.	mala	v. say
4.	belaan	v. talk about, tell, say
5.	murup <sup>ii</sup>	v. ask or tell (someone to do something)

1. *karuh* は動詞だけでなく名詞の意味を持つ点において他の動詞と大きく異なる。しかしながら、その他の相違点を示そうとしても、多くの動詞に ‘say’, ‘tell’ など重複した意味が与えられていることから、この説明だけでは相違点・類似点を明らかにすることが困難である。

### 3. 調査方法

接辞の機能を明らかにするため用いるのは、今までに通算 2 か月行ったフィールドワークのフィールドノートと、Amster (1995) の語彙集、Hemmings (2016) が挙げている例文である。まず、今回初めて明らかとなった発話動詞の機能について例文を挙げ記述し、接辞が付いた際どのような意味になるのか観察する。Hemmings (2016) によって記述されている接辞については機能が妥当かを検討し、他の機能の提案ができそうなものや、記述されていないものについては新しい発見として提案し、フィールドノートや Amster (1995) の語彙集の例を用いて検証していく。

### 4. 発話動詞の機能

#### 4.1. *karuh*

まず *karuh* について観察する。まず *karuh* を用いた例(1), (2)を挙げる。

- (1) ni idah nekaruh lem ayu tetapuh kudih<sup>iii</sup>  
PT 3.pl ne-speak about grandmother 1.sg. GEN

「彼らは私のおばあさんについて話している。」

- (2) uih la? karuh karuh Kelabit.  
1.sg want karuh language Kelabit 「私はケラビット語を話したい」

(1)では *karuh* は接頭辞 *ne-*と前置詞句 *lem ayu* を伴って、「～について話している」と訳すことができ、(2)においては *karuh* は「話す」と「～語」という意味で用いられている。

#### 4.2 *keneh/ken*

続いて、*keneh* について見ていく。*keneh* は Amster (1995)によって ‘(past tense) say, tell’ と記されているが、現在形について言及されておらず、例文を見ると単なる過去時制ではないことがわかる。*keneh* についての例文を収集しようとしていたところ、*keneh* には異形態 *ken* があることが明らかになった。*ken, keneh* は次の(3), (4)の様に使われる。

- (3) ken iah, edto kinih teneb.  
ken 3.sg day now cold 「彼によると今日は寒いそうだ。」

- (4) edto kinih teneb, keneh.  
day now cold keneh 「今日は寒いそうだ。」

- (5) \*keneh iah, edto kinih teneb.  
keneh 3.sg day now cold

- (6) ken Julian, edto kinih teneb.  
ken Julian day now cold 「ジュリアンによると今日は寒いそうだ」

*keneh* は文末に用いられ、文頭で発言をした人を明らかにする場合、「*ken* + 行為者」の形で文頭に置かれるということが明らかになった。

### 4.3. mala

次に、*mala* の例を挙げる。*mala* は Amster(1995)において ‘say’ と記述されている。(7),(8)では「～と言う」という意味で、誰かの発言の内容について述べるため用いられている。

(7) iah **mala** edto kinih teneb.

3.sg mala day now cold 「彼は今日は寒いと言っています。」

(8) Balang Anid **mala** kapeh tauh lun pian ngalap tuhan jesus lem lun tauh  
Balang Anid say how 1.pl man want get God Jesus in life 1.pl

「Balang Anid は私たちがどれだけイエスを人生に迎えたいかと言いました。」

ケラビット語の基本語順は SVO であり (武内 2018)、例文の(7),(8)では「行為者+ *mala* + 発言の内容」という基本語順と同じ構造で文を作っている。*ken, keneh* と比較すると、*mala* は典型的な動詞であるようだが、*ken, keneh* は副詞の様な働きをしていると考えられる。

### 4.4. belaan

次に *belaan* について議論していきたい。*belaan* は Amster (1995) において、‘talk about’, ‘tell’, ‘say’ という動詞であると述べられている。

(9) naʔam nuq **belaan** ku

NEG REL belaan 1.sg 「私には何も言うこと/言いたいことはありません。」

(10) anun **belaan** sinaq ngemalam

what belaan mother last night 「昨夜お母さんが言ったことは何ですか。」

例文から見ると、*belaan* も *mala* のように発言内容について述べていることから、*mala* が派生した語であると考え、同じ内容の文を用いて、派生する前の形である *mala* の例との比較も行った。

(11) tepu mala anun

grandmother mala what 「おばあさんは何と言いましたか」

(12) anun belaan tepu

what belaan grandmother 「おばあさんの言ったことは何ですか。」

ケラビット語は主要部先行の特徴をもつ (武内 2018)。名詞-修飾語の語順を持つケラビットにおいて、(11),(12)の文の構造を見ると *belaan* は明らかに名詞として用いられていることがわかる。つまり、発言をした行為者は、*belaan* の後に修飾語として示されている。

### 4.5. nuruʔ

最後に *nuruʔ* について見ていきたい。*nuruʔ* は Amster (1995) においても ‘ask’, ‘tell (someone to do something)’ と記されており、ほかの語と異なり、説明がより詳細である。「人に～するよう言う」という意味の点で他の語とは異なることは明らかであるが、例文が示されていないため、今回はこの動詞についても記述を行い、その例と使い方について確認したい。

- (13) *nuru?* *senabu?* *ngelaq* *nubaq* *layeh*  
*nuru?* *lady* *prepare* *nubaq* *layeh*  
「あの女の人にヌバラヤを準備するように言ってください」
- (14) *sina?* *nuru?* *anak* *iah* *mudang* *ngi* *ruma?*  
*mother* *nuru?* *child* *3.sg* *stay* *in* *house*  
「お母さんは子供に家にいるよう言った」

#### 4.6. 発話動詞のまとめ

以上の例文を用いて発話動詞を観察した結果、ケラビット語の主要な発話動詞は次のように記述することができる。

表 3 : ケラビット語発話動詞の機能と文の構造

No.	語彙	機能	文の構造
1.	<i>karuh</i>	「S が N (言語) を話す/話す」	S <i>karuh</i> O(言語) <i>karuh</i> lem ayu+N
2.	<i>keneh</i> ( <i>ken</i> )	「S によると～そうだ」 「～そうだ」	ken S (発話者) 《文頭》, ～ <i>keneh</i> 《文末》
3.	<i>mala</i>	「S が S'+V' と言う」	S <i>mala</i> S'+V'
4.	<i>belaan</i>	「(S が) 言ったこと」「(S の) 発言」	<i>belaan</i> S (発話者)
5.	<i>nuru?</i>	「S が (S' に V' するよう) 頼む、言う」	S <i>nuru?</i> S'+V'

以上より、1. *karuh*, 3. *mala*, 5. *nuru?* は文の中の位置から、動詞と分類できるが、2. *keneh* は副詞のように、4. *belaan* は名詞の様に用いられるということが明らかになった。ここからは、例文を採集した際に見られた、これらの動詞に付いている接辞について議論していく。

#### 5. 接辞の機能

これまでに整理した発話動詞につく接辞から、接辞の機能についても考察する。フィールドワーク調査では、*karuh* と *mala* に接辞が付いた例が観察された。*karuh* には *ne-*, *pe-* の2つの接辞がつく可能性があるということが明らかになった。*belaan* については、インフォーマントは、*mala* についているのは *be-* と *-an* と考えているようであった。しかし、*be-* *-an* については *belaan* < *mala* 以外の例が思いつかないという。また、*be-* や *-an* 単独でつくことはないということだった。*ne-*, *pe-* の接辞を伴った発話動詞以外の語や文における元の意味との違いを観察し、その機能について考える。そして、*be-* *-an* が文中でどのように使われるのか、*mala* と文の構造がどのように異なるのかを基に、*be-* *-an* の機能についても考える。

##### 5.1 *ne-*

今までに示した文で、*ne-* が出現したのは、*karuh* の(1)の例文である。下にもう一度示し、さらにインフォーマントから採集した *ne-* を伴う *karuh* を含んだ文(15)を挙げ、文がどのよ

うな意味になるのか、接辞を伴った場合の動詞の機能はどう変わるのかについて考える。

(1) ni idah **nekaruh** ləm ayu tetapuh kudih  
 PT 3.pl ne-karuh about grangmother 1.sg.GEN

「彼らは私のおばあさんについて話している。」

(15) Sina Rang **nekaruh** lem ayu pade  
 Sina Rang ne-karuh about rice 「シナランは稲について話す。」

(1)と(15)はどちらも *karuh* 「話す」に *ne-* が付加された形を用いている。共通する特徴は後に *lem ayu* 「～について」という句が続き、何について話すのかを述べるという点である。(15)と同様の意味にしようと(16)の様に原形の *karuh* を用いることは不可能である。しかし、言語を話すという時には原形のまま用いても容認されていた。(1), (15)の様に「～について話す」という時は原形 *karuh* を用いず、接頭辞 *ne-* を付加した形で用いるようである。

(16) \*Sina Rang karuh lem ayu pade

Amster (1995)による語彙集では、接頭辞 *ne-* を伴っていると考えられる語彙として9つの例が見られた。派生前後の機能の違いを見るため、接頭辞 *ne-* を伴うと考えられるものと、関わっている語彙、例文があればそれを下の表4にまとめた。

表4 : Amster (1995) より 接頭辞 *ne-* を伴う語彙

ne-を伴っていると考えられる語彙	語幹又は別の接辞を伴った語彙
<b>ne-bada?</b> “v. advise”	bada? “n. a call”
<b>ne-ebek</b> “v. pour something with a container” 例 : <b>nebek</b> burak lem belanai ideh naru` lem kedit me neh muyuh nuad <sup>iv</sup> <b>pour</b> ricewine in jar the do in gourd cups go PT 2.pl measure <b>put</b> the rice wine from the jar into gourd cups (kedit) and distribute them.”	ebek “a container or laddle”
<b>ne-keted</b> “v. turn one’s back (on someone)”	keted “n. back”
<b>ne-ganit</b> “v. lightning”	ganit “n. lightning”
<b>ne-nganuh</b> “v. weaving (of a mat)”	singanuh “v. woven”
<b>ne-kedtep</b> “v. blink”	kedtep-kedtep “v. blink”
<b>ne-kelab</b> “v. flap wings”	kelab-kelab “v. flapping wings”
<b>ne-peteg</b> “v. to tap a foot”	peteg-peteg “n. foot tapping”
<b>ne-to?</b> “adv. yet (to do), more” 例 : si?it <b>neto?</b> tu?en ranih beruh little more PREP.for harvest still,yet “a little bit more left to the harvest” 例 : enun <b>neto?</b> tu?en muh? what more PREPfor 2.sg “what more needs to be done”	beto? “adv. yet, more, too”

以上より、接頭辞 *ne-* の付加された語は *ne-to?* を除き全て動詞である。adv.と表記されている

る *neto?* も前置詞が続き、*neto?* 以外に文の主語となる要素がないため、動詞である可能性がある。ここについては今後検証していく必要があるだろう。また、*karuh* の例で見たときと同様、*ne-* を伴ったほとんどの動詞が目的語や対象を要求するもの、または暗に示されているものであった。

## 5.2. *pe-*

*karuh* には接頭辞 *pe-* も付加される例が観察された。下にその例文を挙げる。

- (17) Sina Rang    **pekaruh**    lem ayu    pade  
       Sina Rang    *pe-karuh*    about    rice        「シナラン達は稲について話し合う」
- (18) \*Sina Rang    **karuh**    lem ayu    pade  
       Sina Rang    *karuh*        about    rice

(17)においてはシナランが誰かと話し合うという意味になっている。この文と同じ意味にしようとして原形 *karuh* は用いられない。*ne-*との相違点は *ne-karuh* の場合は *karuh* とする動作をする人物は一人であるが、*pe-karuh* を伴った文には *karuh* 「話す」の相手が存在すると理解される点である。よって、この *pe-* についての Hemmings (2016) の reciprocal (相互) と plural actor (複数動作主体) の記述は妥当だと考えられる。マレーシア語 (Hassan 1974:109-110) とインドネシア語 (Lombard 1977:111-114, 116, 140) においては、接頭辞 *ber-* は動詞の他動詞化、目的語の存在を示す場合に用いられるが、同じ接頭辞 *ber-* に動作の複数性、相互関係が含まれる場合もあると言われている (Brill 2005:59)。よく見られる相互的内容を表す語彙の例として *ber-bantah* 「口論する」 < *bantah* 「～に反駁する、異論を唱える」が挙げられる (Adelaar 1984:411-413)。

Amster (1995)の語彙集から、接頭辞 *pe-* を伴う他の語彙についても、下の表にまとめる。

表 5 : Amster (1995) より 接頭辞 *pe-* を伴う語彙

<i>pe-</i> を伴う語彙	語幹または別の接辞を伴う語彙
<i>pe-baya?</i> “v. walk together”	<i>maya?</i> “v. follow”
<i>pe-bu?uh</i> “v. look after, take care of”	<i>nu?uh</i> “v. care for (someone)”
<i>pe-karuh</i> “v. speaking, conversation, talk”	<i>karuh</i> “n. language, v. speak”
<i>pe-bukut</i> “v. fist fight”	<i>mukut</i> “v. punch, hit, strike”
<i>pe-keted</i> “v. sit back to back”	<i>keted</i> “n. back (part of the body)”
<i>pe-aweh</i> “n. marriage”	<i>aweh</i> “n.marriage”
<i>pe-naru?</i> “n. tool”	<i>naru?</i> “v. make, do, build”

以上より、Amster (1995) の記述には *pe-baya?* “v. walk together” の ‘together’ にこの機能が現れているのみであるが、他の語についても動作主が複数存在するものがあるため、クラブビット語における接頭辞 *pe-* の機能は、複数動作主体と、名詞化であると考えられる。

### 5.3. be- -an

*be- an* については、Hemmings (2016) は *-an* の異形態、*-en* が存在し、両面接辞（接周辞）（*circumfix*）の *pe- -en* が存在すると述べている。どのような規則で *pe-*がつくのかについては言及されていないが、*pedingeren*(\**dingeren*) < *denger*, *pereniyen*(\**reniyen*) < *ranih* という例を挙げ、*pe-*を伴わず、*-an* (*-en*) だけで付加されることはないと述べている。下に *belaan* の例(19), (12)と、同じ内容を *mala* で表した場合の例(11)を再び挙げる。

(19) terima kasi ngan nuk belaan mudih  
thank you with REL belaan 2.sg.GEN 「あなたが言ったことに感謝します」

(11) tepu mala anun  
grandmother mala what 「おばあさんは何と言いましたか」

(12) anun belaan tepu  
what belaan grandmother 「おばあさんが言ったことは何ですか」

はじめは上に書いたように、*belaan* については、*mala* に接周辞 *be- -an* が付いた形であると考えられた。インドネシア語、マレーシア語にも非常に類似した *ber- -an*, *pe- -an* という接周辞が存在している。*ber- -an* の場合は動作や状態の反復や継続、相互を表すと言われている（例：*ber-datang-an* 「次々とやってくる」< *datang* 「来る」、*ber-kenal-an* 「知り合いである」< *kenal* 「知っている」）。しかしながら、Amster (1995) には *be- -an(-en)* が付いたと考えられる他の語は1語も観察できなかった。さらに今まで見てきた表5の *pebaya?* < *maya?* や *pebukut* < *mukut* を見ると、それぞれの語幹は *baya?*, *bukut* であり、*pe-*が付いたものが *pebaya?*, *pebukut* であり、鼻音接辞 *N-*が付いたものが *maya?*, *mukut* であると考えた方が適切である。すると、*belaan* は語幹 *bala* に接尾辞 *-an* が付き、*ba* の母音が *e* に変化した *bela-an* であると考えられる。また、文の構造については、(19)のように、*belaan* のあとに「言った」動作をした人「あなた」が来る際に、*mudih* という属格をとるため、名詞化の機能があることは明らかである。Hemmings(2016)は他にも *gegitan* ‘n. thread’ < *ketian* ‘v. thread’ などの例から、*-an* については「場所名詞化」の機能があると記述しているが、場所に関わらず単純に「名詞化」の働きがあるとした方が適切だと思われる。

## 6. 接辞 *ne-*, *pe-*, *be- -an* の機能のまとめ

1. *ne-* については発話動詞に一般的につくものとして、今回は accidental「付随的」の機能を持つものは観察されなかった。perfective「完了相」の機能をもつ *ne-*と思われる語、文を観察したが、完了の意味は見られず、「テイル」とされる進行相のものも出現していた。また、Amster (1995) における他の語彙で *ne-*を伴うものも、*lem ayu* 「～について」のような「目的・対象」を要求する意味での記述が多かった。今回取り上げた *karuh* の場合、「完了相」「付随的」に関わらない目的・対象を要求するという機能や名詞の動詞化を行う機能も存在が確認できたため、*ne-*の新たな機能として今後研究していくべきである。

2.*pe-*については、reciprocal「相互的」または plural actor「複数動作主体」と考えられる例文を観察したが、文の主語が「シナラン」という単数の人物であっても、*pekaruh* という動詞を使うことで複数の人で議論しているという意味に変化した。今回の発見としては、発話動詞 *karuh* につく場合は「複数動作主」と「相互的」という機能を分ける必要はみられないようであった。

3.と4.の *be- -an* については、*be- -an* はこれまで1つの接周辞であると考えられていた。しかし、他の接辞との接続を見る限り、*bala* という語幹が存在しており、*mala* < *bala* に派生した形が *mala* であり、語幹の *bala* に接尾辞 *-an* が付加されたものが *bela-an* であると考えられる。*-an* の説明としては locative nominalization「場所名詞化」という機能があると説明されていたが、発話動詞 *belaan* < *mala* の場合を考えると、「名詞化」と説明した方がよいと考えられる。

表 6：今回明らかになったケラビット語接辞の機能

No.	接辞	Hemmings(2016)の提案する機能	今回の例から明らかになった機能
1.	<i>ne-<sub>1</sub></i>	perfective (完了相)	対象を要求する機能・名詞化の機能 左で挙げられた機能は観察されず ⇒対象を要求、または暗に示す 「他動詞のマーカ―」か
	<i>ne-<sub>2</sub></i>	accidental (付随的)	
2.	<i>pe-</i>	reciprocal (相互)	「複数動作主の相互的」機能 (reciprocal + plural actor) causative (使役) は観察されず
		causative (使役)	
		plural actor (複数動作主体)	
3.	<i>be-</i>	記載なし	<i>mala</i> < <i>bala</i> ( <i>bala</i> の <i>ba</i> が <i>be</i> に変化) <i>-an</i> 「名詞化」の機能の接尾辞
	<i>-an</i>	locative nominalization(場所名詞化)	

## 7. 今後の課題

接辞の機能について、さらに多くの動詞の例を観察し、他動性、自動性について見ることができればケラビット語の接辞の機能についてより体系的な説明が可能になると考えられる。そのために今後は様々な動詞の機能について明らかにする必要がある。

これまでは語彙の収集や基本語順のための接辞のつかない文の収集を中心に行っていたため、これからは接辞のついたより複雑な文の収集を行い、ケラビット語のより体系的な文法記述を目指して研究を進めていきたい。

<sup>i</sup> ケラビットはアルファベットでは Kelabit と表記される。マレーシア語、インドネシア語と同様に第一音節の *e* は [a] と発音されるため実際はエとウの中間のような音になる。しかし、[e] と [a] が音素 /e/ の条件異音であること、生物学や農学などの分野においてもこの Kelabit を「ケラビット」とする表記をされていることから、「ケラビット」としている。

ii Amster (1995), Hemmings (2016)で用いられている表記は ' である。しかしこの音は声門閉鎖音[ʔ]であるため本稿では音声記号を採用した。

iii 本稿で使用する発話動詞に関する例文は全てフィールドノートの抜粋である。

iv Amster (1995) による例文であるが、この語彙集には例文と英訳文しか表記されておらず、グロスはない。そのため本稿における Amster (1995) の例文には、同語彙集からそれぞれの語に対応する英語を用いて表記した。また、日本語訳時のニュアンスが不明であるため英訳のみ示している。

v Hemmings (2016) によるとケラビット語に *N-* という Actor Voice の機能を持つ鼻音の接頭辞がある。

#### 略号／記号

1,2,3...	人称 (それぞれ 1 人称、2 人称、3 人称)	NEG	否定
sg	単数	PT	Particle
pl	複数	REL	関係節
GEN	属格	<	派生関係を示す (派生語 < 語基)

#### 参考文献

- Adelaar, Karl Alexander. (1984). "Some Proto-Malayic Affixes". *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, 140/4. pp. 402-21
- Amster, Matthew H. (1995). *Kelabit/English English/Kelabit Glossary A Concise Guide To The Kelabit Language*. Kuching: Rurum Kelabit Sawarak.
- Blust, Robert. (2013). *Austronesian Language*. Canberra: Asia-Pacific Linguistics Research School of Pacific and Asian Studies.
- Bril, Isabelle (2005). Semantic and functional diversification of reciprocal and middle prefixes in New Caledonian and other Austronesian languages. *Linguistic Typology*, De Gruyter, 9 (1), pp.25-75.
- Hassan, Abdullah (1974). *The Morphology of Malay*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa Dan Pustaka.
- Hemmings, Charlotte. (2016). *The Kelabit Language, Austronesian Voice and Syntactic Typology*. Thesis submitted for degree of PhD. London: Department of Linguistics SOAS, University of London.
- Simons, Gary F. and Charles D. Fennig (eds.). (2018). *Ethnologue: Languages of the World*, Twenty-first edition. Dallas, Texas: SIL International. Online version: <http://www.ethnologue.com>.
- Takeuchi Yasuka (2016). *A Descriptive Study of the Kelabit Bario Dialect*. Nidaba No.45 39-48: Linguistic Society of West Japan.
- 武内 康佳 (2018) ケラビット語バリオ方言の研究—語順類型論的観点を中心として— 広島大学大学院文学研究科修士論文 (未公開)
- \* 本稿は西日本言語学会 2018 年大会の発表「ケラビット語バリオ方言における接辞 *ne-*, *pe-*, *be-* *-an* の機能について 発話動詞 *karuh*, *keneh*, *mala*, *belaan*, *nuru?* を中心に」を発展させたものである。